

グローバル化と途上国の小農

序 章

グローバル化と途上国の小農

農業経営分析からの接近

重 富 真 一

はじめに

これまで開発途上国の農村では、小農と呼ばれる小生産者が数のうえで圧倒的な部分を占め、経済と社会の基幹を担ってきた。ここで「小農」とは、家計の再生産を目的として、家族を基幹労働力とした農業生産活動をおこなう経済主体のことである。1980年代以降のグローバル化は、そうした途上国農村の経済をも巻き込んだ。小農は彼らの生産物や投入資材、あるいは資本、労働力を通してグローバルな市場と直接間接に繋がるようになったのである。

これは二重のインパクトをもたらした。まず小農はより深く市場に巻き込まれるようになった。通常グローバル化は経済の自由化をとともなうから、小農も市場原理により強く捉えられるようになった。次に小農は新しい市場と対面するようになった。これまで小農は生産物の販売、投入財の購入、あるいは労働力の販売(賃労働)など様々な形で市場を利用してきた。しかし彼らの対面する市場が世界市場と結びつくことで、そこにいくつかの変化が現れた。たとえばこれまで彼らが生産したことのない商品の市場が現れる。既存の生産物でも新しい品質基準が求められるようになる。あるいは生産物の取引方法や取引相手が変わり、ひいては生産方法自体が変わることもある。小農のもつ資源(たとえば労働力)の新しい販売市場が現れて、家族労働力を

土地に結合させるという小農本来の生産様式自体が解体する場合すら出てきた。

こうした二重のインパクトが小農に届いたとき、その経済はどのように変わるのだろうか。すでに「グローバル化」が途上国農業、農村にもたらす影響について論じた研究は多くある。そのほとんどは、マクロあるいはせいぜい市場流通局面のデータをもとにして、グローバル化の功罪を論じるものである。しかしグローバル化が農村に新たな市場をもたらしたとしても、小農すべてがその恩恵を受けられるわけではないし、また逆にすべてが不利益を被るわけでもなかろう。いかなる条件をもつ小農が市場機会を捉え、どのような変化を経験したのか明らかにするためには、ミクロレベルの実態把握が不可欠である。そこで本書では、個別世帯の経営調査に基づいてグローバル化の影響を分析しよう。それは、小農を基幹としてきた途上国の農業が、生産現場でどのように変わりつつあるのかを示すことでもある。

なおここで「グローバル化がもたらした市場機会」という場合、必ずしも小農の生産物が海外市場で売られることのみを想定していない。グローバル化はしばしば農産物の国内市場を変化させ、それが小農にとっての新たな市場となる場合がある。こうした間接的なものも含めて、グローバル化のもたらす市場機会を考えたい。

以下本章では、まずグローバル化の実態について、先行研究の議論と農産品貿易の統計分析をもとに検討する（第1節）。次に、グローバル化がもたらす環境変化に対して小農がとる経営行動の分析枠組みを提示する（第2節）。そして最後に、本書各章の議論を紹介しつつ、本書全体の主張を述べたい（第3節）。

第1節 グローバル化の実態把握

1. 「グローバル化」の事実認識

「グローバル化」(globalization)という言葉が、文献に頻繁に登場するようになるのは1990年代の後半からである⁽¹⁾。多くの論者が、「グローバル化」なる現象を、1990年代、早くても1980年代から起きたものとみている。また「グローバル化」を、個人や経済組織が国境を越えて関係しあう度合いが高まる現象と理解するのが一般的なようだ(高橋 [2001], Robertson and White [2003], Perraton [2003])。それは経済や社会の自然な変化というよりも、むしろ何らかの主体や制度によって強制的にもち込まれるという面をもつ。すなわち「グローバル化」には基準があって、それはアメリカなど先進国のそれに従っており、WTOなど国際機関や国際協定を通して強制される、というのである(McMichael [1996], Epp and Whitson [2001], 大野 [2000])。

こうした「グローバル化」が実際にどの程度起きているのかについて、研究者の意見は必ずしも一致していない。Perraton [2003]によると、国家という単位が無意味化したとみる高度グローバル化論者(hyper-globalist)、それに対する懐疑論者(skeptical views)、およびグローバル化を経済活動が国境を越えて広がっていく過程とみる移行論者(transformationalist)があるという。この移行論者のなかでも、移行のスピードや度合いをめぐる見方は分かれる。Perraton [2003]は国境を越えた経済活動の比重が高まっていることを強調するが、Hirst and Thompson [2003]は1850-1914年と比較して1950-2000年の商品、資本、労働力の国際移動が大きいとはいえないと主張する。Sutcliffe and Glyn [2003]はグローバル化の程度が統計的事実よりも過大に評価されているという。

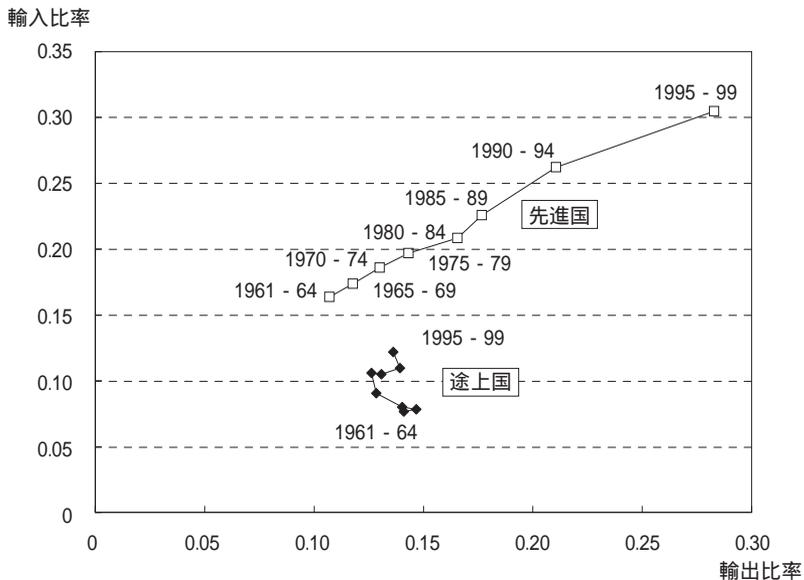
現在の「グローバル化」が過去に比べて特筆すべきものか否か、あるいは統計的な事実に基づいたものかについて見解の相違があるにせよ、過去20年

ほどの間に、商品、資本、労働力の国境を越える移動や連動関係が増大してきたことは、多くの論者が認めるところである。次にみるように、農産物という商品については貿易の増加が統計的にも確認できる。

2. 農産物市場のグローバル化と途上国

図1は、国内生産量に占める輸出量の割合（輸出比率）、国内消費量に占める輸入量の割合（輸入比率）を農産品の品目ごとにとって単純平均し、1960年代からの変化を5年区切りの平均値でたどりながら、途上国と先進国に分

図1 途上国、先進国別にみた輸出比率と輸入比率の推移



(出所) FAOデータベース (FAOSTAT) のFood Balance Sheetsをもとに筆者作成。

(注) 先進国のstimulants (嗜好性飲料: コーヒー, ココア, 紅茶) は極端に伸びが大きいので除外して平均をとった。

(2) 輸出比率 = 輸出量 / 国内生産量。輸入比率 = 輸入量 / 国内供給量。

(3) グラフの各点は5年間の平均を示す。途上国については始点の1961 - 64年平均と終点の1995 - 99年平均のみ表示した。

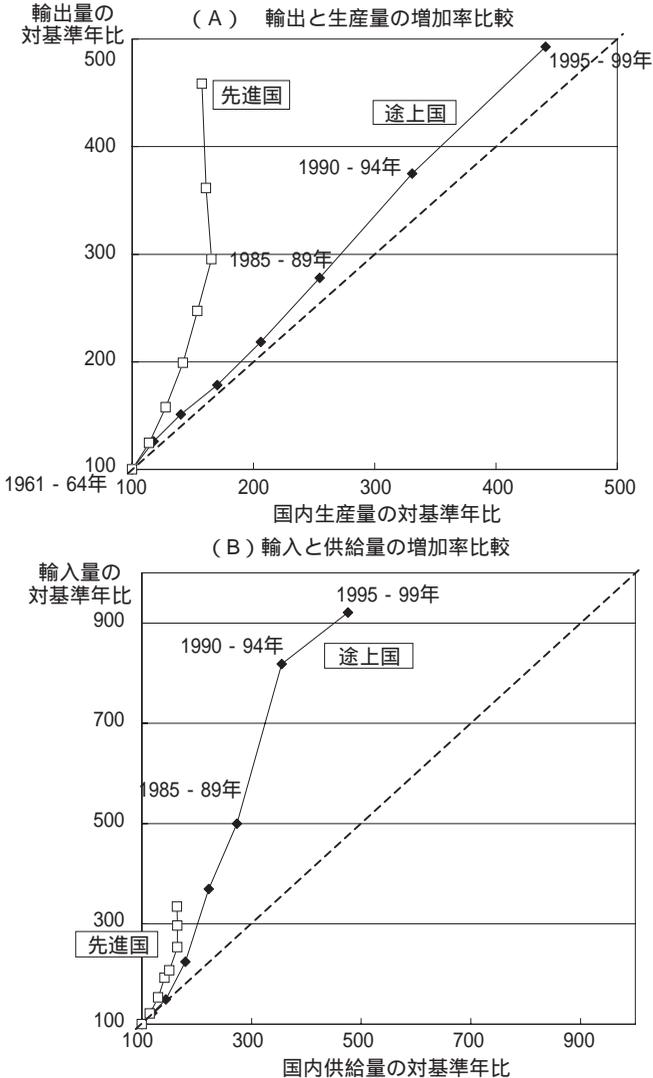
けてきたものである⁽²⁾。この図から以下のことをみてとれよう。まず先進国では、グローバル化が進んだとされる1980年代後半から輸出比率、輸入比率が大きく伸びた。そのため、途上国は輸出比率において先進国に追い越され、輸入比率については大きく水をあけられた形になっている。これをみる限り、「グローバル化」はきわめて先進国的現象ということになる。

しかし途上国では、先進国とは異なった形でグローバル化が進んでいるのである。図2の(A)は国内生産量と輸出量、また(B)は国内供給量と輸入量の変化を、1960-64年平均を100として示したものである。途上国は先進国に比べると、国内生産量、国内供給量が増加しつつ、輸出量、輸入量ともに増えていることがわかる。つまり途上国農産物市場のグローバル化は国内市場の拡大と平行して進んでいたのだ。また明らかに1980年代後半からの輸出の伸びが顕著である。その傾向はアジア、ラテンアメリカではっきりとみてとれるし、1980年代の輸出落込みが激しかったアフリカでも、1990年代以降は輸出入とも伸びている(重富[2006])。

次に途上国からの農産物輸出先をみると、先進国の比重が大きいことがわかる(図3)。1980年代後半から先進国市場の拡大とともに途上国市場も拡大してきた。輸出品目についてはAksoy[2005]が1980年代以後について、熱帯農産物(コーヒー等の嗜好性飲料、木の実、スパイス、繊維作物など)、高度に保護された温帯農産物(畜産物、穀物、油脂作物など)、伸びの大きい非伝統農産物(野菜、果物、花卉、水産品など)、その他農産加工品(タバコ、飲料など)にわけて貿易統計を分析している。それによると途上国からの輸出に占める熱帯農産物の比重は減って、逆に非伝統農産物のそれが増えている。また途上国からの輸出農産品中、最終製品の比重が高まる傾向にある。

このように、1980年代後半以降、途上国は国内の生産消費を増大させつつ、農産物の貿易を急速に拡大している。その市場は未だ先進国が中心であるが、近年、途上国向けも拡大してきた。そして輸出品は伝統的農産品からより付加価値の高い最終製品に近いものに移ってきている。農産品という商品を通して、グローバル化はより多くの途上国農業生産者にまで届きつつあるとい

図2 輸出と生産量，輸入と供給量の増加率にみる途上国と先進国の違い



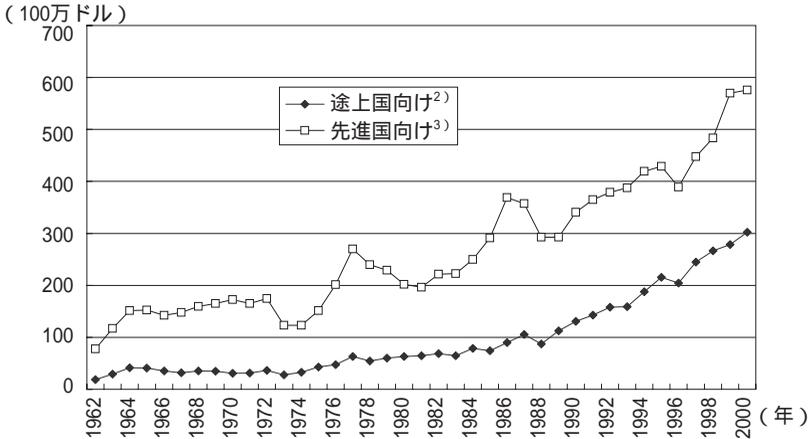
(出所) 図1に同じ。

(注) (1) 先進国のstimulants(嗜好性飲料: コーヒー, ココア, 紅茶)は極端に伸びが大きいので除外して平均をとった。

(2) 1961-64年の平均値を100として, 各5年期間ごとの平均値の比率を算出し, 時系列でつないだ。

(3) 破線は45度線。

図3 途上国からの食料、家畜輸出額推移（輸出国当たり平均¹⁾，1995年を100とする価格指数でデフレート）



(出所) UNCOMTRADEより2005年12月にダウンロードしたデータをもとに作成。

価格指数はIMF *International Financial Statistics Yearbook*, Washington, D. C. : IMF, 各年版。

(注1) 輸出額のデータがある国の数で、輸出総額を割って算出した。

2) 途上国とはアフリカ、アジアの途上国とラテンアメリカ諸国を指す。

3) 先進国とは日本、EU15カ国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドを指す。

えよう。

第2節 グローバル化と農家経済

1. 先行研究におけるグローバル化の影響分析

こうしてグローバル化が途上国農家に何らかの影響をもたらしているとしても、その評価については研究者の間で理解が異なっている。Bigman[2002]は、農村住民や貧困層への影響に関する議論を検討したうえで、グローバル化には「良い面と悪い面」(pros and cons)がある、とまとめている。グロー

バル化で利益を受けた国、地域、階層、集団がある一方で、マイナスの影響をうけたところもある、というのである。Herrin [1999] は同じ貧困者でも、生産者、労働者、消費者どの側面をみるかで影響の評価は異なると論じた。また短期的な要素価格変動と長期的な生産拡大とでも、グローバル化の影響は異なるであろう。

多くの小農がグローバル化の影響を受けるのは、彼らの生産する農産物の市場を通してであろうが、それに限っても研究者の評価は分かれる。Herrin [1999] は、輸出農産物生産者は利益を受けるとしているし、Killick [2001] は、市場アクセスの良い場合にグローバル化のプラス効果があるとしている。Coleman, Grant, and Josling [2004] は、途上国の輸出農産物は加工度が低いのでグローバル化は不利に働くとする。逆言すれば、加工度の高い農産物を生産する場合には有利ということになる。1997年の世界銀行レポートでも、農村と輸出市場の結びつきが農民の所得を引き上げると主張されていた (IBRD [1997])。以上の議論に共通するのは、グローバル化の提供する市場機会が (もしあれば)、途上国の農業生産者に有利に働くという見方である。

これに対して市場機会自体を否定的にみる論者もいる。伊豫谷 [2001] は、農民の基礎食料生産までが商品経済に巻き込まれることで、農民の貧困化、労働者化が進むとみている。市場メカニズムの浸透が農村内格差、農民層の分解、農民の労働者化をもたらすという主張は根強い (辻 [2002], Flora [1990], Murray [2003])。Shiva [2002] のように、農産物貿易の自由化が基礎食料の安定供給を脅かすという主張もある。

このような規範的主張をともなった研究に比べると、農業生産者が実際にグローバル化をどのように受け止めたのかに関する実証研究は少ない。メキシコにおける経済自由化とメイズ農家の対応を分析した Preibisch, Herrejon, and Wiggins [2002], チリの果実生産におけるグローバル化のインパクトを調べた Murray [2003], ラテンアメリカ諸国における資本主義的な家族農場の登場を論じた Llambi [1989], メキシコの果実生産農家や野菜農家をとり上げた Echanove [2005] や Stanford [2000], 自由化による生産手段への

アクセス変化についてベトナムとインドネシアの事例をとりあげた辻[2002]などが、グローバル化に対する農家の反応に言及しているくらいである。

しかしこれらも農業生産主体の個別経済を十分分析しているとはいいがたい。多くは農業生産者をひとくくりにして国際市場の影響を評価している。Preibisch, Herrejon, and Wiggins[2002]以外、個別農家の経営データを示したうえで議論しているものはない。こうしてグローバル化のインパクトが個別の農家にどのように受け止められたのかは、不明のままなのである。

2. 本書の分析視角

(1) 流通過程の把握

グローバル化の影響が途上国の小農に届くまでには、いくつかの媒介項が必要である。海外の市場機会は、まず国と国の間をつなぐ流通チャンネルを通して途上国にまで届く。その過程でしばしば流通制度と担い手に変化が起きる。新たな取引方法や輸送方法が生みだされたり、それを担う新たな企業が参入することがある。途上国に届いた市場機会は、さらに国内の流通チャンネルを通して農村の生産現場にまで届く。そこでも流通制度と担い手に変化をもたらすことが少なくない。たとえば日本の冷凍鶏肉市場とタイが結びついたとき、小商人の現物取引が主体であったタイ国内の鶏肉流通制度は、大手企業による契約取引に取って代わられた。鶏を飼う農家にとっての流通制度は、まったく違ったものになったのだった。

したがって、小農に対するグローバル化のインパクトを論じる前に、それが伝わってくる流通制度や担い手について論じておかなばならない。とりわけ小農が直接対面する段階の流通制度、担い手は重要である。小農は経済理論上の「市場」と直面するのではなく、「具体的な制度をもった市場」と直面するのである。そうした制度を利用できるものだけが市場にアクセスできる。農村に具体的に存在する「市場」は、そうした限定的、選別性格を有するものであろう。本書の各章でも、小農の経済を分析する前に、そうした具体

的な市場のあり方に言及がなされる。

(2) 農業生産主体の経営行動把握

新たな市場機会が農村にまで届いたとしても、その受け止めかたは農業生産主体側の条件によって異なる、というのが本書の仮説である。ここでいう「農業生産主体側の条件」には2つの要素がある。

ひとつは資源である。農業生産者は資源を生産過程に投入することで再生産を図る。そうした利用可能な資源がどれだけあるかは、生産主体によって異なっている。資源は経営体の内部資源と外部資源にわけて考えねばならない。内部資源の大小は経営体の再生産水準をある程度決めるであろう。たとえば大きな自作地をもつ農家は、得られる農業所得も大きい。仮に内部資源が不足しても、不足分を外部から調達できれば生産規模は同じになる。生産主体の入手可能な外部資源がどれだけあるか、ということも「農業生産主体側の条件」として考えよう。

外部資源の場合、それへのアクセス条件が重要になる。いくら資源が存在していてもアクセスできなければその経営にとって意味がない。アクセスの方法には、市場、組織、採集があるが、農業生産者がこうした方法をとって資源を入手できるかどうかも「農業生産主体側の条件」である。

このような枠組みは生計アプローチ (livelihood approach) と呼ばれる方法と共通する部分がある (Ellis 2000)。生計アプローチは農家の生存戦略を「資源にアクセスして入手し、経済活動に結合する」という形で図式化し、途上国の農家は多様な生存戦略を組み合わせていることを強調する。資源が経営体の内部にあるか外部にあるかにはあまり関心がない。

しかし内部資源は一般に外部資源よりも動員が容易である。しかも外部資源へのアクセスが内部資源の状況によって規定されることがある。たとえば所有地の大きさが、資本借入の条件になるという場合を想像すればよい。あるいは経営主のもつ縁故関係や社会的地位をたどって情報が入り、資源の入手機会が増えるということもある。このように同じ資源でも、内部資源は農

業生産主体側の条件としてきわめて重要である。

経営体の内部資源を重視して、農業経営体の行為を説明しようとしたのは伝統的経営経済学の系譜を継ぐ吉田忠らであった（吉田・乗本 [1977]）。吉田らによると、経営者は経営体の所有ないし占有する生産要素を持続的に再生産することに経営目標をおき、それにしたがって経営管理をおこなう。つまり経営内生産要素の所有結合形態（経営構造）が経営目標を規定するとみるのである。自作農であれば、家族労働力と自作地の再生産を図ろうとするから、所得と土地の維持が経営目標となるが、企業的経営であれば投下した自己資本に対する利潤率を指標として目標を立てるだろう。そしてこの経営目標が経営管理行動を規定する。しかしこうすると、同じ経営構造の経営主体がとる経営行動の違いを説明することが難しくなる。たとえば「自作農」という同一類型内の違いは捨象されてしまう。

同じ経営構造をもった農業生産主体の経営行動の違いを説明するためには、経営構造に規定される最終的経営目標よりも、それに到達するための手段、すなわち資源とアクセス条件に注目しなくてはならない。これは生計アプローチが強調した点であった。本書では、経営体の内部資源を重視しつつ、経営体がアクセスできる資源の賦存状況とそれへのアクセス条件に注目することで、小農が新しい市場機会をどのように受け止めるのかをみることにしよう。

第3節 本書の要約と主張

以上のような分析枠組みを用いて、我々はアジア、アフリカ、ラテンアメリカの9カ国において農村調査を実施して小農の経営経済を分析した。そこで明らかになったのは、グローバル化のもたらす市場機会が、いくつかの限定性をもって小農の前に現れるということである。

まず生産物の市場機会自体に限定性がある。エチオピアのコーヒー輸出に

は近年、フェアトレードという、より高価格を実現する流通経路が加わった（第1章、児玉論文）。実際、フェアトレードのブランドでコーヒーを売る農民は、より高い分配率で報酬を得ている。しかしそれらの商品は組織（ここでは協同組合）を通して取引されるから、小農は協同組合に所属しなければ市場機会を利用することはできない。協同組合への参加機会は誰にでも開かれているわけではなく、また協同組合自体もその資金的制約からすべてのコーヒーを上記の新しい流通ルートにのせられるわけではない。この事例は、小農にとっての現実的な市場機会が限定性をもって存在していることを示している。

かりに生産物の市場機会が小農の前に存在しているとしても、小農は要素市場の限定性に直面する場合がある。ペルーのアスパラガス生産の場合（第2章、清水論文）、当初小農はアスパラガス缶詰加工輸出企業がもたらした市場機会を得て、高い所得を実現していた。ところが国際市場での競争激化でアスパラガス価格が下落すると、輸出企業は自社農場からの原料調達に切り替えたため、小農の多くは他の作物に転換せざるをえなかった。近年、生鮮輸出用グリーン・アスパラガスの市場機会が現れて小農は栽培を再開したが、生産性向上投資が不十分な状態では、価格次第で参入退出を繰り返すだけであろう。小農には長期資金市場へのアクセスが限られており、たとえ施設投資をおこなったとしても、企業農場並みの生産費を実現するには栽培面積規模の拡大が必要だが、周囲の農地を容易に入手できる状況にはない。

ベトナム北部山岳地帯（第3章、荒神論文）では、政府が森林率と農民所得の向上を目的として、林地を住民に分配し、茶やパルプ原料などの工芸作物、林産物の生産を奨励した。この地域の農民は、政府によってグローバル市場に繋がる機会をもたらされたのである。しかしこの機会をつかんだのは、政府との関係が近いごく一部の住民であった。農家間の土地取引市場がほとんど成立していないこの地域では、今後追加的な土地入手は難しいであろう。また労働市場の展開も限られているなかで、大きな林地を得ても経営は容易でない。

中国山東省のリンゴ産地を調査した山田（第4章）によると、近年東南アジアや先進国といった海外市場が加わり、リンゴの生産・流通システムが変化している。政府や果汁加工企業は輸出品質基準に合わせてリンゴの生産工程を管理するため、生産農家の組織化を進めている。そうした組織に入れた農家は、高い所得と利潤を実現していることがわかった。しかし世帯員数に合わせて狭小な土地を平等に分配する中国の土地制度のもとで、一定規模以上の生産団地化は村による土地再分配が前提条件となる。ここでも土地という生産要素は市場的な取引で集めることが制度的に困難である。

マラウイでは、タバコという国際市場に連なる作物の栽培機会が、政策転換によって突然、小農にもたらされた（第5章、原島論文）。しかし小農が実際にその機会を捉え、かつ所得を確保するには一定程度以上の経営耕地面積が必要であった。タバコ価格のよい時期に小さな作付面積で参入した農家は、タバコ価格の下落した現在、土地の新たな取得も難しい状況で、栽培からの撤退を迫られている。タバコ農家は高いタバコ収入のみならず、自給用メイズでも高い生産性を実現しているが、その経済機会は一定以上の経営耕地をもつ農家に限られていた。

このように、生産物の市場はグローバル化されても、生産要素の市場はきわめてローカルにしか存在しない場合が多い。農業生産にとってもっとも重要な土地は、国際的に取り引きされない。労働力ももっぱら地域で調達される。その場合、地域における資源の賦存量だけでなく、取引制度のあり方も要素調達の機会を規定するであろう。

外部資源の量的限定性が生産活動を規定する場合もある。ミャンマーでは最近になって、天然エビの輸出機会が開かれた。岡本（第6章）によると、その機会を捉えた漁業者は刺し網漁、トロール漁という2つの方法でエビをとっている。その所得は従来の農業所得をはるかに上回る。とくにトロール漁の場合、かなりの初期投資資金が必要であるが、刺し網漁のように比較的必要資本の少ないものから入り、そこで資本を蓄積することで参入も可能であった。ところが参入者が増えると資源の乱獲が起き、漁獲高、収益性とも

低下してきた。天然漁業に不可避の漁獲高の不安定性が、経営の持続性を損なう状況が今後ははっきり出てくるであろう。これは単に資源量の問題ではなく、資源獲得制度の欠陥も示している。

地域に十分な資源があり、また要素市場が成立していたとしても、それを利用できるか否かは経営体の内部資源のあり方によっても規定される。第7章（重富論文）では、東北タイの養鶏インテグレーションを取り上げて、契約養鶏への参入条件と参入後の経営成果を検討している。農家は自家あるいは近親親族の土地を担保にして、施設建設のための初期資本を政府系金融機関から借り入れた。土地という経営内部資源が、資本という外部資源獲得の条件であった。また世帯のもつ親族関係も、情報入手の重要な内部資源であった。普及当初の簡素な飼育施設の場合、必要な担保地面積が小さく、参入障壁はさほど高くはなかったが、その後施設の高度化が求められると必要資本額を調達できる農家は限られてくる。鳥インフルエンザを契機に多くの農家は養鶏から脱落したのである。

インドでは企業による切花の輸出が、国内にも新しい市場を作り出した。第8章（久保論文）は、そうした市場にバラを供給するようになった小農の事例分析をおこなっている。それによると、経営主は高学歴で技術や市場に関する情報を入手し、高収益を実現しているが、栽培管理の質を維持するためあくまで家族労働力を基本として、栽培面積をあまり拡大させない。収益性向上のためにはビニールハウスの導入が必要だが、政府補助金の受給対象となって制度金融にアクセスしなければ低利の融資資金が得られない。この事例では、教育水準や補助金受給資格といった経営内部属性が、外部資源へのアクセス制約条件になっている。

カンボジアは農林水産業に限るとかなり自給自足的であり、グローバル化のインパクトはむしろ農外に供給される労働力商品を通して農村世帯に届いている（第9章、天川論文）。すなわち外資の縫製・製靴工場での雇用機会が、農家に農業所得よりもかなり高い労賃収入をもたらした。しかしこの労働市場は誰にでも開かれているわけではない。家業の農業経営を労働力面で担う必

要がない20歳前後の未婚女性がいる世帯，しかも就業機会の情報が入りやすい村にある世帯に偏る傾向がみられた。

こうして生産物の市場機会と生産要素の要素市場があっても，経営体の内部資源量に規定されて，市場機会をつかむことのできる小農は限られる。社会関係によって情報に偏りが生じたり，土地や資本の不足や労働市場の求める労働力がないといった理由から，市場機会を所得向上に結びつけることができないケースがみられた。

このように本書の各論文は，グローバル化がもたらす市場機会を，農村の生産現場に立って，小農の立場から精査している。その結果，生産物の市場機会自体，あるいは要素市場，外部資源の賦存量，経営の内部資源に限定性があるために，誰もが市場機会を自己の経済的利益に結びつけられるわけではないことがわかった。これまでの研究はマクロデータや流通段階の分析にとどまっていたから，グローバル化には正負の両面があるとか，受益者而非受益者があるという一般論の域を出なかったが，我々はそうした違いをもたらす条件を特定することができたのである。

グローバル化が各途上国の小農に及ぼす影響を全体として評価するには，本書で示した条件をもつ小農が，どれぐらいの層をなして存在しているのかが明らかにしなくてはならない。本書のような農家の実態を丹念に調べる研究が蓄積されていった時に，そうしたマクロの分析と評価が可能になるであろう。

〔注〕

- (1) EconLit, CSA Worldwide Political Science Abstractsの各データベースで，タイトルにglobalizationまたはglobalisationという語が使われている文献を検索したところ(2007年4月23日)，1980年代発行はたった38点だったのに対し，1990年代発行は1670点にまで急増していた。しかも1990年代発行のうち89%が1995年以降のものであり，2000年代になるとさらに増加して，2006年発行分までも5696点を数えた。
- (2) 詳しい計算方法は重富[2006]を参照されたい。

〔参考文献〕

< 日本語文献 >

- 伊豫谷登士翁 [2001] 『グローバル化と移民』 有信堂高文社。
- 大野健一 [2000] 『途上国のグローバル化と発展』 東洋経済新報社。
- 重富真一 [2006] 『グローバルレベルの農水産品・食料・肥料貿易と途上国のグローバル化』 (重富真一編「グローバル化と途上国農村市場の変化と統計的概観」アジア経済研究所 1-22ページ)。
- 高橋克秀 [2001] 『グローバル・エコノミーと途上国』 東洋経済新報社。
- 辻雅男 [2002] 『市場メカニズムのグローバル化における東南アジア諸国の農業・農村』 (石田修・深川博史編『国際経済のグローバル化と多様化2 アジア経済とグローバル化』九州大学出版会 107-126ページ)。
- 吉田忠・乗本秀樹 [1977] 『農業経営と収益性』 (吉田忠編『農業経営学序論』 同文館 49-85ページ)。

< 外国語文献 >

- Aksoy, M. Ataman [2005] The Evolution of Agricultural Trade Flows, "in M. Ataman Aksoy and John C. Beghin eds., *Global Agricultural Trade and Developing Countries*, Washington, D.C.: World Bank, pp.17-35.
- Bigman, David [2002] The Pros and Cons of Globalization for Developing Countries: A Review of the Theoretical Issues and the Empirical Debate, " in D. Bigman ed., *Globalization and the Developing Countries: Emerging Strategies for Rural Development and Poverty Alleviation*, Hague: CABI Publishing, pp.27-79.
- Coleman, William, Wyn Grant, and Tim Josling [2004] *Agriculture in the New Global Economy*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar.
- Echanove, Flavia [2005] " Globalisation and Restructuring in Rural Mexico: The Case of Fruit Growers, " *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, 96(1), pp.15-30.
- Ellis, Frank [2000] *Rural Livelihoods and Diversity in Developing Countries*, Oxford: Oxford University Press.
- Epp, Roger and Dave Whitson [2001] Introduction: Writing off Rural Communities, " in Roger Epp and Dave Whitson eds., *Writing off the Rural West: Globalization,*

- Governments and the Transformation of Rural Communities*, Edmonton: University of Alberta Press and Parkland Institute, pp.xiii-xxxv.
- Flora, Cornelia Butler [1990] “ Presidential Address: Rural Peoples in a Global Economy, ” *Rural Sociology*, 55(2) pp.157-177.
- Herrin, Alejandro N. [1999] “ The Impact of Globalization and Economic Liberalization on Population Change and Poverty in Rural Areas, ” in Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (ESCAP) ed., *The Impact of Globalization on Population Change and Poverty in Rural Areas*, Bangkok: ESCAP, pp.1-32.
- Hirst, Paul and Grahame Thompson[2003] The Future of Globalisation, ”in Jonathan Michie ed., *The Handbook of Globalisation*, Cheltenham: Edward Elgar, pp. 17-36.
- IBRD [1997] *Rural Development: From Vision to Action*, Washington, D.C.: World Bank.
- Killick, Tony [2001] “ Globalisation and the Rural Poor, ” *Development Policy Review*, 19(2) pp.155-180.
- Llambi, Luis [1989] “ Emergence of Capitalized Family Farms in Latin America, ” *Comparative Studies in Society and History*, 31(4) pp. 745-774.
- McMichael, Philip[1996] Globalization: Myths and Realities, ”*Rural Sociology*, 61(1) pp.25-55.
- Murray, Warwick E. [2003] “ From Dependency to Reform and Back Again: The Chilean Peasantry during the Twentieth Century, ” in Tom Brass ed., *Latin American Peasants*, London: Frank Cass, pp.190-227.
- Perraton, Jonathan[2003] The Scope and Implications of Globalisation, ”in Jonathan Michie ed., *The Handbook of Globalisation*, Cheltenham: Edward Elgar, pp.38-60.
- Preibisch, Kerry L., Gladys Rivera Herrejon, and Steve L. Wiggins[2002] Defending Food Security in a Free-Market Economy: The Gendered Dimensions of Restructuring in Rural Mexico, ” *Human Organization*, 61(1) pp.68-79.
- Robertson, Roland and Kathleen E. White [2003] “ Globalization: An Overview, ” in Roland Robertson and Kathleen E. White eds., *Globalization: Critical Concepts in Sociology, Volume I: Analytical Perspectives*, London: Routledge, pp.1-44.
- Shiva, Vandana [2002] “ Globalisation of Agriculture, Food Security and Sustainability, ” in Vandana Shiva and Gitanjali Bedi eds., *Sustainable Agriculture and Food Security*, New Delhi: Sage Publications, pp.11-64.
- Stanford, Lois [2000] “ The Globalization of Agricultural Commodity Systems: Examining Peasant Resistance to International Agribusiness, ” in Angelique

Haugerud, M. Priscilla Stone, and Peter D. Little eds., *Commodities and Globalization: Anthropological Perspectives*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, pp.79-96.

Sutcliffe, Bob and Andrew Glyn [2003]“ Measures of Globalisation and Their Misinterpretation, ” in Jonathan Michie ed., *The Handbook of Globalisation*, Cheltenham: Edward Elgar, pp.61-78.